

## ラジオと芸能—1950年代上海を例に

森平崇文（神戸学院大学・グローバルコミュニケーション学部・准教授）

芸能を観賞する方法は劇場に限定されるものではない。レコード、ラジオ、映画、テレビなどのメディアを通じて、文字化された劇評、脚本を通じて、舞台写真や役者のブロマイド写真を通じて、それぞれ芸能に触れることはできる。ラジオはその簡便さにおいて20世紀を通じて中国では芸能を鑑賞するに際し特に一般的なメディアであった。本発表では、中華人民共和国が成立した直後の1950年代上海を対象とする。1950年代の上海においては、それ以前のスポンサーの商品宣伝を主とする民営ラジオ局が乱立していた状況が次第にプロパガンダ的要素の強い公営ラジオ局に統合され、一方で芸能界でも演劇界を中心に社会主義的な改革が広く展開していた。本発表では1950年代の上海を代表するラジオ局「上海人民広播電台」で刊行されていた「毎週広播」に掲載のラジオ番組表を手がかりに、中華民国期のラジオ放送における芸能番組との比較を行い、併せてラジオ番組において京劇や話劇など全国的にメジャーな芸能の他に上海ならではの各地方戯がどの程度参入しているのかに焦点をあてて紹介したい。

キーワード：ラジオ、上海、上海人民広播電台、地方戯、越劇

## はじめに

観客が芸能に触れる方法は、劇場に足を運び、生の舞台を観劇するだけに限定されるものではない。ラジオ、テレビ、映画、レコードなどを通じて、さらに新聞や雑誌に掲載された劇評や文字化された脚本を読む、役者絵やブロマイド写真、公演プログラム、ポスターを見るなどまで含めると、視覚や聴覚による芸能の鑑賞方法は実に多様である。メディアの数だけ芸能との接触方法はあると考えるべきである。

ラジオは20世紀初頭に放送を開始したが、テレビが主流となる20世紀中期以前は新聞、映画と並び、マス・メディアの中心にあった。ラジオ・ドラマを含む、芸人がラジオ放送で直接パフォーマンスを行う以外にも、レコードを流したり、舞台の中継をしたり、放送の形態は様々である。

本稿は1950年代上海のラジオ放送における芸能番組を対象に、中華民国期との比較を通じて20世紀中国における芸能とラジオの関係について考察することを主題としている。考察する時代を1950年代に設定するのは、人民共和国成立直後にあたり、ラジオ放送も他のメディア同様、社会主義的改造によってそれ以前と大きく変容したからである。言及する地域として上海を選ぶのは、当時中国最大の経済都市であり、また中国におけるラジオの誕生地であって、中華民国期に民営ラジオ局を中心としたラジオ放送が国内でも活発であったため、ラジオと芸能の関係を考察するにあたり適当と判断したためである<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 20世紀上海におけるラジオと芸能の関係を考察する研究成果は決して多くない。特定のジャンルの芸能とラジオ放送との関係を論じたものに、Carlton Benson, “*The Manipulation of Tanci in Radio Shanghai during the 1930s*”, *Republican China*, 1995, Vol. 20, Issue 2, pp. 117-146、馮曉聰『民国時期廣播電台與滬劇發展研究』上海師範大学修士論文、2018年、がある。前者は弾詞、後者は滬劇とラジオ放送との関係を対象としている。また独脚戯とラジオの関係を対象としたものに、拙稿「ラジオ時代の「滑稽」—筱快樂と〈社会怪現象〉」『中国—社会と文化』2007年、第二十二号、183-199頁がある。この他、申浩『從邊緣到中

## 1、中華民国期上海のラジオ番組と芸能

中国のラジオ放送は上海で誕生した。アメリカ人 E. G. Osborn が設立したラジオ局 “Radio Corporation of China” が 1923 年 1 月 23 日に共同租界内の広東路に英字紙 “The China Press” との共同で 20 時から 1 時間の放送したのがその始まりである。中国系初の民営ラジオ局による放送は、1927 年 3 月 18 日に四大デパートの 1 つ新新会社が設立した「新新廣播電台」であった。1932 年には大中華廣播電台が出力 500W で放送を始め、上海だけでなく北京、天津、福建、広東、安徽、湖北、江西など各地にも電波が届くようになった<sup>2</sup>。

戦後内戦期の 1947 年に出版された『大上海指南』では、当初は鉱石ラジオで値段も約 10 元と高価だったためあまり注目されてこなかったが、この 10 年あまりで真空管ラジオが普及したことで、ほとんどの家庭でラジオを設置するようになったと紹介している<sup>3</sup>。実際、1936 年 8 月から 9 月にかけて上海国際電信局で始まった登記では、全国で約 7 万台のラジオが登記されている<sup>4</sup>。同じく上海国際電信局の統計によれば、1934 年 1 月の段階で上海には 51 のラジオ局が設置されていた<sup>5</sup>。また上海の聴取者は上海以外にも首都の南京の他、北京、天津、無錫、浙江などのラジオ局の放送も聴取していたようである<sup>6</sup>。

---

心：晩清以来上海評彈研究』上海師範大学博士論文、2012 年、及び王婉如『上海抗戰時期戲曲活動研究』上海師範大学博士論文、2019 年、では特定の時期やジャンルを論じる中でラジオと芸能関係についても一部言及している。さらに劉月影『無線電廣播与上海早期都市文化建構（1923—1949）』上海師範大学修士論文、2012 年では、中華民国期におけるラジオ放送と上海都市文化を論じている。ただし本稿が対象とする 1950 年代の人民共和國期のラジオ放送に関しては、孫安石「上海人民廣播電台と新中国のラジオ放送—革命と政治動員」『電波・電影・電視』青弓社、2012 年、108-136 頁がある程度で、管見の限り、芸能とラジオ放送の関係を対象とした論考は確認できていない。

<sup>2</sup> 《上海廣播電視志》編輯委員会編『上海廣播電視志』上海社会科学出版社（上海）、1999 年、19 頁。

<sup>3</sup> 王文昌編著『大上海指南』東南文化服務社（上海）、1947 年、180 頁。

<sup>4</sup> 前掲『上海廣播電視誌』、21 頁。

<sup>5</sup> 同上、20 頁。

<sup>6</sup> ラジオ情報紙『電声日報』第 273 号、1933 年 2 月 8 日、のラジオ番組表には上海のラジオ局以外にも各地のラジオ局の番組が掲載されており、上海以外の各地から上海のラジオ放送を聴取していたと同時に、各地のラジオ局の放送も上海で聴取していたと推察できる。

中華民国期上海のラジオ放送の特徴は外国資本を含む民営ラジオ局が圧倒的であったことで、公営ラジオ局は上海でラジオ放送が始まってから10年以上が経過した1935年3月に交通部上海広播電台、1936年3月に上海市政府広播電台がそれぞれ放送を開始している。民営ラジオ局による放送が多数乱立していた状況下だったことが関係し、中華民国期上海では娯楽番組と宣伝番組が番組の多数を占めていた。

以下1930年代、日中戦争時期、1940年代の戦後内戦期の各時期における上海のラジオ番組の状況を時代順に紹介したい。表1は1932年の番組表である。

表1 上海（亜美）ラジオ局番組表（1934年2月5日の週）<sup>7</sup>

時間	番組（括弧内は出演者、団体）	時間	番組（括弧内は出演者、団体）
07:00-08:00	上海気象情報	16:20-16:50	児童番組、各種学術講演
08:00-08:45	国学講義（戚飯牛）	16:50-17:00	金、その他の取引市場情報
09:00-10:00	綿花・証券・金・外国為替情報、レコード	17:00-17:45	蘇州文書『玉連環』（王宝慶）
10:45-	綿花・穀物・証券	17:45-18:00	無線常識問答、モールス符号練習、レコード
10:50-11:00	レコード	18:10-	国語講演（国語教育促進会）
12:00-12:30	金取引、最新薬品、レコード	19:05-19:50	蘇州文書『麒麟豹』（王宝慶）
12:30-12:59	最新レコード	19:50-20:00	各種レコード
13:00	上海天文台時報	20:00-20:45	弾詞『三笑』（蔣如庭・朱介生）
13:30-14:15	弾詞『果報録』（程方舟）	20:45-20:55	各種レコード
14:15-14:30	為替・金・穀物・綿花取引情報	20:55-21:40	弾詞『九絲縵』（陳瑞麟・陳雲麟）
15:00-16:00	聊齋志異、一文銭（吳愔）	21:40-21:50	レコード

<sup>7</sup> 『中国無線電』第2巻第3期、1934年（頁数は不明、上海市檔案館・北京広播学院・上海市広播電視局合編『旧中国的上海広播事業』檔案出版社／中国広播電視出版社（北京）、1985年、124-126頁より引用）をもとに筆者作成。芸能番組は太字にしてある。

16:00-16:10	証券・綿花・穀物取引 情報、レコード	21:50-22:50	歌唱（清声団）
		22:50-23:00	レコード

上海の民営ラジオ局はその放送内容が局や時期によって様々であり、表1でもって中華民国期上海の民営ラジオ局の番組内容の典型が分かるわけでは決してない。あくまでも1例である。表1の上海（亜美）ラジオ局は、1929年に放送を開始し日中戦争期間に放送を停止した後、1946年9月に放送を再開させており、中華民国期上海の民営ラジオ局の中でも局としての歴史が特に長いラジオ局であった。表1を見ると、気象情報や時報以外に時事的な情報を流すのは取引情報と講演程度で、いわゆるニュース的なものはない。芸能関係は弾詞、蘇州文書とレコード、歌唱となっており、弾詞と蘇州文書は1番組45分で統一されている。レコード番組も含めれば、19時5分以降の夜の番組は全て芸能関係の内容となっており、1日の半分は芸能番組で占められている。

弾詞とは江蘇省蘇州を起源とする語り物芸能で、三線や琵琶を演奏しながら主として1人ないし2人で演じられる。さわりの歌唱の部分「開篇」にはアドリブで様々な内容の歌詞を入れることができ、商品や会社の宣伝に効果的であったため、弾詞は上海のラジオ局で特に人気の芸能となった<sup>8</sup>。当時複数のラジオ局がこの弾詞「開篇」のアンソロジーを出版しており、その1つに「利利」ラジオ局が出版した『嫋嫋集』がある。そこには作品名でラジオ局「利利広播無線電台」とその親会社「利利土産公司」の他、絹布を扱う「老九和綢緞局」と「光明大光明綢布染廠」、さらに革製品を扱う「天發祥皮貨局」、飲料「金牛牌鮮橘水」、豆炭の「東方象牌衛生煤球」、冠婚葬祭の品を扱う「源源永礼品局」という開篇が収録されており、商店や商品をストレートに宣伝している<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 1938年11月29日の『申報』の記事によると、上海のラジオ番組で最も多いのが弾詞で、40分の弾詞番組が毎日103番組放送されていた（前掲『上海廣播電視志』、25頁より引用）。

<sup>9</sup> 倪高風編『嫋嫋集』第二期（開篇専号）、利利無線電台（上海）、1934年、開篇1-3、5-14頁。このうち、利利無線電台、利利土産公司、老九和綢緞局、天發祥皮貨局に関しては2作品ずつ収録されている。

実際、商品宣伝に有利な芸能を含む娯楽番組は上海ラジオ番組の花形であり、1936年10月28日には管轄する交通部が「指導全国広播電台播送節目弁法」を公布し、民営ラジオ局で娯楽番組は全体の6割を超えぬよう、また娯楽番組内での広告宣伝は3分の1を超えぬよう通達しているほどであった<sup>10</sup>。表2は1939年に三友実業社という薬品会社がスポンサーとなっている上海各局の番組表である。

表2 三友実業社提供番組一覧（1939年）<sup>11</sup>

時間	ラジオ局	番組（括弧内は出演者、団体）
08:30-09:10	華東	故事
09:10-10:00	華東	小問題（ト万動）
11:00-13:00	華東	音楽レコード
13:00-15:00	華東	京劇レコード
14:00-16:00	華威	什景小曲（雲裳社）
15:30-17:00	華東	歌曲レコード
17:00-18:00	華東	越劇レコード
18:00-19:10	華東	越劇（馬樟花）
18:40-19:20	民声	弾詞『三笑』（巖雪亭）
19:10-20:20	華東	申曲（王鶴蓀・陳雲宝）
20:20-22:00	華東	申曲（譚蓮芬・鮑福奎・朱仕林）
21:20-22:00	天蟾	滑稽（春蔭団）
22:00-24:00	華東	什曲レコード
22:00-24:00	華盛	特別レコード
24:00-02:00	華盛	什景小曲（於斗斗・徐文娟）
02:00-03:00	大美	故事（何松蔭）

表2からは、午前8時半から夜中の3時まで、午前10時から1時間を除く全ての時間（複数の番組が重なる時間も含め）で三友実業社提供の番組が放送されており、16番組

<sup>10</sup> 前掲『上海広播電視志』、22頁。

<sup>11</sup> 四而社編『無線電』第6期、四而社、1939年、裏表紙をもとに筆者作成。

の内、10番組は華東ラジオ局に集中していることが分かる。表2の典拠資料には上海にある33の民営ラジオ局一覧も掲載されているが、三友実業社は華東を中心に6局に限定されている<sup>12</sup>。しかも提供番組が娯楽番組に集中していて、芸能ジャンルも弾詞の他、越劇、申曲（後の滬劇、以下「滬劇」に統一）、滑稽（什景小曲も含む、独脚戯の別称もあり、本稿では以下「滑稽」に統一）、京劇と多岐にわたっている。中華民国期すでに国劇の地位を確立していた京劇の花形役者がラジオ局の生放送に出演するケースは特別な番組を除いて多くなく、レコードを流すことが中心であり、演劇のジャンルでは新興の越劇、滬劇、滑稽（後の滑稽戯）の人気芸人がラジオに出演していた。生出演することで、番組中に芸人にリクエストすることも聴取者には魅力的であった。表2からは1939年の時点ですでに越劇も生出演の他にレコード番組が確認でき、上海における越劇の人気の高さが窺える。

ラジオ番組における局とスポンサー、出演者との関係について、1944年当時の日本側資料であるが、1920年代から1931年前後までの状況につき、「聴取料はとらず、広告主に電費と称して放送時間を賃貸しすれば広告主の方で適当な芸人をみつけ、その買った時間に芸人の口からなり或いは演芸の合間に放送員なりに自家商品広告をさせるのであって謝礼は全部、広告主の負担となる仕組みである」と紹介している<sup>13</sup>。つまり広告主と芸人の関係は極めて近く、芸能番組において広告主に関係する商品や店舗、企業の広告宣伝することがむしろ当然であった。これは表2を見ると日中戦争以後の上海でも同じであったようである。

日中戦争時期の1938年3月には「上海広播無線電監督処」が設立され上海のラジオ放送も日本軍の管理下に置かれ、1941年12月には太平洋戦争の勃発で上海の民営28局が閉鎖されるなどの規制を受けた。戦後の1945年12月には市内に16の局が放送を行

---

<sup>12</sup> 「上海各大広播電台一覧表」同上、1頁。

<sup>13</sup> 小森龍「十三、放送」上海市政研究会編『上海の文化』華中鉄道株式会社総裁室弘報室（上海）、1944年、382頁。ちなみに筆者小森龍は当時上海広播無線電台に所属していた。

い、1946年4月には40局以上が加盟した「上海市廣播電台聯合会」が設立されている

14. 戦後内戦時期がそれまでと決定的に異なるのは租界が1943年に消滅したことで、1946年9月には米軍を除く外国系ラジオ局の設立が取り消されている。1946年7月には2 或いは4の民営局が1つの周波数を共有し、交替で放送する方式が始められた。表3は1946年12月時点の上海のラジオ放送におけるジャンル別番組表である。

表3 戦後内戦期上海のラジオ放送におけるジャンル別番組表<sup>15</sup>

ジャンル	番組数	ジャンル	番組数	ジャンル	番組数
教育	23	レコード	197	越劇	15
常識	23	弾詞・評話	42	滬劇	27
消息（報道）	63	故事	23	滑稽	44
児童番組	4	京劇	5	四明南詞・四明文書	16
歌唱・音楽	31	話劇	11	その他	29

この時点で上海には公営と民営を合わせて53のラジオ局があり、最も早い局で6時45分から、最も遅い局で24時40分まで放送していた16。複数の民営局を1つの周波数に統合する一方で、憲兵司令部の「勝利」、国民党上海特別市第三区執行委員会の「九九」のように、公的機関を背景としたラジオ局が多く設立され、周波数の制限を受けていなかった。これに対し管轄する上海電信局などは1946年9月7日に8局の責任者を招集し、放送停止するように指導したが、同年11月になっても公的機関の名義を借りて、広告収入目当てに放送する局はあとを絶たず、封鎖しても勝手に封鎖を解いて放送を再開するという状況であった<sup>17</sup>。

<sup>14</sup> 前掲『上海廣播電視志』、28頁。

<sup>15</sup> 「播音節目分類表」小舎蓮花館主編輯『勝利無線電』第10期、1946年をもとに筆者が作成。

<sup>16</sup> 「上海各廣播電台表」張元賢、蓮花館主、於斗斗、湯筆花編輯『勝利無線電』第十二期、1947年、によると1947年2月の時点で上海のラジオ局は29局に縮減されており、約半年間で半減している。

<sup>17</sup> 前掲『上海廣播電視志』、29頁。

表3を見ると、「消息（報道）」番組の多さが目立つが、10分単位の番組が多く、放送時間数としてはさほど多いとはいえない。芸能関係では滑稽と弾詞・評話がほぼ同数で最多となっている。話劇とは通俗話劇を指し、商業性が強く、日本の新劇と同義の「話劇」ではない。京劇は5番組中4番組が劇場中継で、天蟾舞台、黄金大戲院、中国大戲院の各劇場から、天蟾舞台では程硯秋と譚富英、中国大戲院では梅蘭芳と楊宝森の共演となっており、番組数自体は少ないものの京劇界の花形役者たちの公演が聴ける。舞台中継は京劇以外にも、越劇で九星と国泰大戲院、滬劇では皇后の各劇場からの番組が確認できる。「故事」とはトーク番組のことで、陸希希、錢无量、裴揚華のように滑稽芸人や、湯筆花や蓮花館主のように小報などのメディアを拠点とする文筆家たちが多く担当していた。その他には仏教講座や哲学講座の他、甬劇、蘇灘、粵曲など中国各地の芸能が含まれている。注目すべきはどちらも浙江省寧波一帯を起源とする芸能の四明南詞と四明文書の番組の多さで、両芸能が遊戯場などでの公演以外に、ラジオを拠点としていたことがわかる。

表3を見れば圧倒的に多いのがレコード番組であることは明白で、200近い番組数を誇っている。その番組も西洋音楽、流行音楽、中国民族音楽から京劇、越劇、滬劇まで多様で、弾詞や北方の大鼓、広東の粵曲のレコード番組まであり、実演の公演以降にジャンルは多様であった。表2の1939年時点では確認できなかった滬劇のレコード番組まであり、舞台中継も含めて上海では越劇と滬劇が京劇に伍す市場を有していたことがわかる。

以上表1から3を通じて、1930年代から1940年代までの3つの時期の上海におけるラジオ放送状況を紹介してきた。どの時期も上海市内に公営と民営のラジオ局がひしめいており、宣伝広告を主とした芸能番組が非常に多い。京劇など地位の高い芸能は実演よりもレコード番組が中心であるのに対し、上海とその近郊を起源とする芸能はラジオ放送を拠点としたものも少なくなかった。

## 2、人民共和国成立初期上海におけるラジオ番組と芸能

1949年5月27日、上海市を管理下においた共産党軍は直ちに国民党系の上海廣播電台を接収管理し、上海人民廣播電台を設立して放送を開始する。同年12月1日には民営ラジオ局の登記を通じて市内に22局が放送を許可され、うち17の民営局は2局で1つの周波数を共有し、交互に放送することとなった<sup>18</sup>。ただしこの登記を通じて管理する、また周波数を複数の局が共有し交互に放送するという方法は中華民国期と大きな差はない。1950年4月1日、上海にもう1つの公営ラジオ局として華東人民廣播電台が設立され、一方の上海人民廣播電台が3つの、華東人民廣播電台が2つの周波数を使用した。

上海のラジオ放送にとっては大きな転換点は、1952年10月1日、16の民営局が公私合営の結果、「上海聯合廣播電台」1局に統合されたことである。使用できる周波数は3つであった。そして1953年10月、自ら望んでという形式で上海聯合廣播電台は上海人民廣播電台に吸収され、1956年には上海聯合廣播電台名義の放送を全て停止してしまう。ここに30年近く続いた上海市内における民営ラジオ局の放送は完全に姿を消してしまうのである。さらに1955年1月、華東行政区廃止に伴い華東人民廣播電台が放送を停止すると、上海市内には上海人民廣播電台1局という状況になったのである。表4は1951年5月時点での上海市内のラジオ局の一覧である。表4からは21の内、公営2局、合営2局、民営17局が確認できる。

表4 上海市内ラジオ局一覧（1951年5月）<sup>19</sup>

局名	周波数	経営形態
華東人民 上海人民	800、5985、9730 900、1020、1280	公営 公営
滬声、大滬	1070	合営
亜美、麟記	670	民営

<sup>18</sup> 前掲『上海廣播電視志』、33頁。

<sup>19</sup> 大公報出版委員会編『新上海便覧』上海大公報出版（上海）、1951年、188-189頁をもとに筆者作成。

元昌、合衆	750	民営
大陸、大中華	930	民営
東方、華美	1310	民営
民声、中華自由	1340	民営
大衆、九九	1370	民営
金都	1400	民営
建成、新声	1430	民営
大中国	1460	民営
亜洲	1490	民営

本章では人民共和国成立以後から民営ラジオ局が消滅するまでの1950年代前期の上海におけるラジオ放送状況について紹介する。

『大戲考』はレコードの歌詞を文字化した歌詞集である。1929年の第1版以来版を重ね、中華民国期には類似本も含めレコードファンだけでなく、ラジオ放送のレコード番組を愛聴するリスナーにとっても手元においておきたい書物であった。人民共和国成立以後の1951年にも『袖珍 大戲考』が刊行されている<sup>20</sup>。初版の編者であった蘇少卿も京劇録音の編選顧問に名を列ねた同書には、京劇のほか、越劇、滬劇、弾詞、歌唱の各ジャンルの作品が収録されている。中華民国期に刊行されていた『大戲考』に比べると、掲載作品のジャンルが極端に減少している。全598頁の内、ワイヤレコーディング作品も含めて京劇が331頁と半数以上を占め、越劇が61頁、滬劇が56頁、弾詞が61頁とほぼ分量となっており、歌曲は49頁という構成である。

興味深いのは京劇、越劇、滬劇、弾詞に新しい社会主義社会を賞賛するような内容の作品や共産党政権が高評価する作品がほぼない（弾詞に『小二黒結婚』がある程度）のに対し、歌曲の方は中華民国期の流行歌がなく、『康定情歌』のようなフォークソングと、『光榮的紅旗』、『東方紅』のような社会主義的歌曲で占められている点である。これは

<sup>20</sup> 鮑承欽『袖珍 大戲考』天下書報社（上海）、1951年。

伝統演劇界の社会主義的改造が不十分であり、レコード化されてラジオ放送でも流せるような人口に膾炙した作品が多くなく、レコードやラジオ放送の聴取者も耳に馴染んだ作品を聞いたがっている状況を反映していると考えられる。つまり、民営ラジオ局が消滅する以前のラジオ放送における芸能番組は、出演者の変更は一部に見られるが、放送される作品そのものは人民共和国成立以前と大きな異同が見られないと考えられる。

1950年代初期の民営ラジオ局の放送状況に関して、別の資料を紹介したい。1951年4月に上海で刊行された『広播群像』である。「群像」という章に顔写真つきで、ラジオ局の経営者が19人（全て男性）、続いて各局のアナウンサー18名（男性3人、女性15人）、さらにコマーシャル担当者10人（全て男性）が紹介されている。他に教育番組の担当者として掲載されている12名（男性5人、女性7人）には担当番組も紹介されており、医学薬学常識、無線電技術、生活常識、会計、撮影、児童、女性問題、裁縫刺繍、料理など様々である。

芸能としては掲載が多い順に、弾詞・評話41人、滬劇36人、滑稽・通俗話劇28人、ラジオ・ドラマ23人、越劇18人、故事11人、粵劇7人、甬劇6人、東方紅歌詠団6人、揚劇4人、四明南詞3人、となっている<sup>21</sup>。粵劇や四明南詞など劇場公演として市場をほぼ失っている芸能がある一方で、淮劇のように上海の地方劇として戦後内戦期以降台頭し共産党政権の覚えめでたい芸能であっても、民営ラジオ局が中心の「群像」では全く紹介されていないなど、ここでも人民共和国以前を引き継いでいることがわかる。

また同じ「群像」には、弾詞の番組「空中書場」の他、京劇、越劇、滬劇、揚劇、レコード番組の担当アナウンサーも顔写真つきで紹介されており<sup>22</sup>、その名前の横には弾詞の場合はラジオ局、京劇は「京劇晚会」、「京劇録音」、「曲芸晚会」と番組名で、越劇は「玉蘭」、「少壯」、「芳華」、滬劇は「芸華」、「英施」、「良友」、揚劇は「芸宣」の各劇団名がそれぞれ記されている。局、番組、劇団によって担当アナウンサーが異

<sup>21</sup> 程叔銘主編『広播群像』天下書報社（上海）、1951年、8-50頁。

<sup>22</sup> 原文では「節目報告者」となっている。

なっていることがわかる。さらにレコード番組では、「新生百代公司」と会社名の場合、「粵曲」、「洋楽」などジャンル名の場合、「音楽展会」と番組名の場合と、肩書きがそれぞれ異なっている。当然といえばそうなのであるが、上海のラジオ放送において芸能番組に専属のアナウンサーがいたことも確認できる。

さらに注目すべきは「群像」には弾詞の番組で「票友」と呼ばれるセミプロたちが紹介されていることである。それぞれ団体があり「和平社」からは12組、計17人、「申社」からは3組、計6人、「中西社」からは3組、計6人がそれぞれ紹介されている<sup>23</sup>。上述のように中華民国期からラジオ放送の娯楽番組において弾詞は特に歓迎された芸能であったが、ラジオ放送と掛け持ちでライブ公演もこなすプロの人気者に加えて、セミプロ愛好家たちもプロに混じってラジオ番組において弾詞を語っていたことがわかる。『広播群像』を通じ、これまでほとんど明らかにされてこなかった人民共和国内立初期における上海の民営ラジオ局の芸能番組に関して、その一端を明らかにすることができた。このような状況は1956年に民営ラジオ局が完全に消滅するまで、一部継続されていたのであろう。

### 3、1 局体制化のラジオ番組と芸能

1955年1月1日、華東行政区の廃止に伴い華東人民広播電台が放送を停止すると、上海市内のラジオ放送は公営の上海人民広播電台1局体制となった。チャンネル数は1956年11月5日より5チャンネルから7チャンネル、1959年5月4日からは6チャンネルと異同が見られる。6チャンネル時期には、ダイヤル990がニュース、1040が音楽、1110が弾詞・評話と滑稽、1290が京劇と地方劇、1500が滬劇と地方劇、1210が教育、をそれぞれ中心に放送するという方針がとられた<sup>24</sup>。本章ではこの1955年以降のラジオ放送について芸能番組を中心に紹介したい。

---

<sup>23</sup> 前掲『広播群像』、28-29頁。

<sup>24</sup> 前掲『上海広播電視志』、45頁。

1955年1月1日より上海人民広播電台は『毎週広播』という番組紹介紙を刊行した。人民共和国成立以降初のラジオ番組専門紙であった。1961年8月21日に共産党上海市委員会による刊行物圧縮の指示で一時停刊したが、1962年9月28日には復刊している。表5は同紙掲載の情報をもとに作成した1956年5月21日から1週間の番組表である。

表5 上海人民広播電台における芸能番組の放送時間一覧<sup>25</sup>

放送時間 (ダイヤル)	ジャンル	21日 (月)	22日 (火)	23日 (水)	24日 (木)	25日 (金)	26日 (土)	27日 (日)
11:40- 12:40 <u>7:50-8:50</u> (860)	越劇	上海越劇院	合作越劇団	芳華越劇団	芳華越劇団、 浙江越劇団	上海越劇院	上海越劇院	上海越劇院
12:30- 13:30 <u>10:00- 11:00</u> (1080)	京劇	梅葆玥、 周和桐	杜近芳、 梅蘭芳	楊宝森、 李和曾	裘盛戎・ 李多奎、 蕭長華・ 姜妙香	程硯秋	尚小雲、 張文涓、 徐碧雲	譚富英・ 慈少泉、 趙文奎
12:50- 13:50 <u>9:00-10:00</u> (860)	滬劇	上海市人民滬劇団	芸華滬劇団	楊飛飛、 上海市人民滬劇団	長江滬劇団	長江滬劇団	長江滬劇団	上海市人民滬劇団
14:00- 17:30 (860)	滬劇/ 紹劇/ 甬劇/ 越劇/ 京劇	滬劇(上海市人民滬劇団)、 越劇(合作越劇団)	紹劇(同興紹劇団)、 甬劇(鳳笙甬劇)	越劇(上海越劇院)	滬劇(長江滬劇団)	京劇(中国京劇団)、 廬劇(王本銀、王金翠)、 紹劇(筱昌順、陸長勝等)	越劇(春光越劇団、上海越劇院)	京劇(程硯秋)、 滬劇(蘇州市建新少壯滬劇団)
18:00- 19:00 (1080)	淮劇/ 揚劇	春光淮劇団、 揚劇(顧玉君・丁曼華)	揚劇(筱奎童・華美紅)、 上海市人民淮劇団	淮劇(上海市人民淮劇団)	揚劇(蔡元慶・筱幼琴)	淮劇(志成淮劇団)	揚劇(房竹君・蔣劍峰・王秀蘭)	淮劇(上海市人民淮劇団)

<sup>25</sup> 『毎週広播』第73期、1956年5月21日、をもとに筆者作成。放送時間の下線部分は翌日の再放送。

19:00- 22:30 (1080)	曲芸/ その他	相声、京韻大鼓、京劇、川劇、粵劇	单弦、河南墜子、京劇、豫劇、呂劇	河南墜子、山東琴書、淮劇、京劇	河南墜子、樂亭大鼓、京劇、黃梅戲	樂亭大鼓、山東琴書、京劇、評劇	曲芸晚会、京劇晚会、粵劇晚会	京劇『群英会』 (馬連良、譚富英等)
19:10- 23:00 (860)	滬劇/ 越劇/ 評彈	滬劇(勤芸滬劇団、滬西工人俱樂部業余文工団滬劇隊)	越劇(前新新越劇団、丁賽飛、筱月英等、陸錦花、戚雅仙等)	滬劇(上海市人民滬劇団、大衆劇場中継)	越劇(上海越劇院、人民大舞台中継)	滬劇(上海市人民滬劇団、大衆劇場中継)	評彈(沈瑞康、吳介人)、中篇評話(張鴻声、吳子安、唐耿良)	越劇(南京市実験越劇団、芳華越劇団、光明越劇団)
20:00- 20:45 11:30-12:15 (1330)	滑稽/ 説唱	滑稽戲(大公滑稽劇団)、説唱(徐匯区工人業余文工団)	相声(黄浦区工人業余文工団)、浦東説書(上海市電車公司)、説唱(新豊印染廠滬劇組)	滑稽戲(大公滑稽劇団)、相声(上海市電車公司説唱組)	滑稽戲(大公滑稽劇団)、説唱(大公滑稽劇団)	説唱(市政搬運工会業余文芸隊、提藍橋区工人業余文芸隊)、滑稽(大公滑稽劇団)	滑稽晚会(玫瑰滑稽劇団、蜜蜂滑稽劇団)	滑稽(大公滑稽劇団、蜜蜂滑稽劇団)
22:15- 23:15 10:20- 11:20 (1330)	彈詞/ 評話	沈偉鵬、姚蔭梅、姚蔭梅・王伯蔭・陳希安	楊振言、楊振言・陳希安・王伯蔭	薛筱卿、姚蔭梅・葛佩芳・高美玲	隴学庭、王伯蔭・楊振言・陳希安・高美玲	朱慧珍、何学秋・周燕雯・徐琴芳	徐麗仙、徐翰芳・劉美仙・何学秋	周玉泉、趙漢祥・侯莉君・鐘月樵・徐琴芳

表 5 からは上海人民広播電台の芸能番組に関して多くのことが読み取れる。まず、再放送を含めるといずれかのチャンネルで朝の 7 時代から夜の 23 時代まで芸能番組があり、チャンネルは周波数 860、1080、1330 のいずれかになっていることがわかる。次に、26 日の土曜日には曲芸晚会(西河大鼓、弾弦、樂亭大鼓、相声)、京劇晚会(演目『玉堂春』梅蘭芳、程硯秋、荀慧生、尚少雲、姜妙香、杜麗雲)、粵劇晚会、滑稽晚会が放送され、曲芸では馬增芬、馬增蕙に侯宝林・郭啓儒の相声、京劇では 4 大女形が名を列ねるなど豪華な顔ぶれによる番組となっている。

そして 23 日と 25 日の大衆劇場での滬劇、24 日の人民大舞台での越劇では、舞台中継の番組も確認できる。また越劇、滬劇、淮劇、滑稽戲など上海に市場を有する地方劇の番組では出演者や団体が特定ではなく、例えば淮劇では上海市人民淮劇団、春光淮劇団、志成淮劇団というように、複数の劇団や芸人が交代で出演している。一方の京劇に関しては、上海を代表する俳優周信芳が 25 日、言慧珠が 21 日、童芷苓と李玉茹が 22 日に出演する程度で、上海の京劇団所属の俳優以上に全国的に著名な各地の京劇団に所属する俳優が出演していることがわかる<sup>26</sup>。

さらに、滬劇や説唱ではプロ以外にも工人倶楽部や会社に所属するアマチュア団体が複数出演していることが確認できる。特に説唱のジャンルでは、平日の 21 日から 25 日まで異なるアマチュア団体が出演していてその傾向が強い。また、曲芸/その他のジャンルでは京劇の他、川劇、評劇、黄梅戲、粵劇、豫劇、呂劇といった中国各地の伝統演劇及び様々な河南墜子、山東琴書、樂亭大鼓といった上海以外の各地の芸能が出演しており、中華民国期上海のラジオ放送とは様相を異にしている。これは人民共和国成立に伴い、中国各地から上海へと新たに大規模な人の移動が行われたことにより、ニューカマーの聴取者へ自らの故郷の芸能を聴かせるという配慮も背景として考えられる。最後に中華民国期に上海のラジオ放送の王様であった弾詞に関しては再放送も含めて 1 日に合計で 2 時間に過ぎず、放送時間自体は縮小されている。

伝統演劇以外の話劇に関しては固定の番組はなく、日曜日の「星期文芸節目」というダイヤル 1290 の 14 時から 17 時までの番組があり、そこで 5 月 27 日には安徽省話劇団の『帰来』、上影演員劇団の『婦女代表』、前華東話劇団の『技術員来了』が放送されている<sup>27</sup>。この週末の特別番組には他にも 27 日にダイヤル 1350 の「星期戲曲節目」という番組に上海を代表する滑稽と評弾の 5 組が出演しているが、そこには「聴衆の要求に応じ

---

<sup>26</sup> 表 5 の 19 時からの「曲芸/その他」の京劇の部分で出演している。

<sup>27</sup> 前掲『毎週広播』第 73 期。

編成した南北曲芸交流公演の中の南方曲芸」と紹介されている<sup>28</sup>。つまり聴取者のリクエストに応じて番組を編成したことになり、音楽番組でも歌曲、軽音楽、ソ連音楽、クラシック音楽を問わず、「聴衆のリクエストに応じて編成した番組」と特記された番組が確認できる<sup>29</sup>。芸能番組に関しては週末の特別番組以外でも別の日時に20時からの「滑稽と説唱」で1週間全て聴取者のリクエストに応じて番組を編成していることが確認でき、定期的に聴取者のリクエストに応じていたようである<sup>30</sup>。

1950年代後期の上海におけるラジオ放送は、中華民国期に比べ、スポンサー提供番組や番組内での宣伝広告などがなくなり、弾詞や滑稽の番組も少なくなったが、一方で聴取者からのリクエストや劇場中継などは存続されていた。また特定の芸人や劇団、団体による固定番組は少なくなる一方で放送される芸能のジャンルは上海及びその近郊を超えて南北各地の芸能が聴取できるようになっている。

## おわりに

社会主義中国以後、芸能番組に関してもプロパガンダ色が強まり、娯楽的要素は薄められたという印象がある。本稿の考察を通じ、確かに上海人民広播電台1局体制以降、故事や四明南詞といったラジオ特有の番組は姿を消し、また特定の芸人や団体が毎日特定の時間に出演するといった現象は見られなくなった。しかしその一方で1局でも複数のチャンネルがあり、朝から晩まで芸能関係の番組が放送されていて、上海市内の芸人や団体が交互に出演し、中国各地の芸能まで幅広く聴取できる機会を上海の聴取は得ることができるようになったことがわかった。また時に聴取者からのリクエストに応じた番組編成を行い、出演者にとって舞台出演よりもハードルの低いアマチュアの出演も多いなど、ラジオ

---

<sup>28</sup> 同上。

<sup>29</sup> 同上。

<sup>30</sup> 『毎週広播』第85期、1956年8月13日。

放送の特性を活かした番組作りも明らかにできた。最後に政治運動のキャンペーン期間を除くと、伝統芸能の分野では伝統演目も多く番組でかけられており、1950年代の上海においても芸能好きにとってラジオ放送は重要なメディアである点が確認できた。

参考文献

**【単行本】**

上海市政研究会編、『上海の文化』、華中鉄道株式会社総裁室弘報室（上海）、1944年

倪高風編、『嫋嫋集』第二期（開篇專号）、利利無線電台（上海）、1934年

王文昌編著、『大上海指南』、東南文化服務社（上海）、1947年

大公報出版委員会編、『新上海便覧』、上海大公報出版（上海）、1951年

鮑承欽、『袖珍 大戲考』、天下書報社（上海）、1951年

程叔銘主編、『広播群像』、天下書報社（上海）、1951年

上海市檔案館・北京広播学院・上海市広播電視局合編、『旧中国的上海広播事業』、檔案出版社／中国広播電視出版社（北京）、1985年

《上海広播電視志》編輯委員会編、『上海広播電視志』、上海社会科学出版社（上海）、1999年

**【論文】**

森平崇文、「ラジオ時代の「滑稽」—筱快樂と〈社会怪現象〉」『中国—社会と文化』、2007年、第二十二号、183-199頁

孫安石、「上海人民広播電台と新中国のラジオ放送—革命と政治動員」、『電波・電影・電視』青弓社、2012年、108-136頁

劉月影、「無線電広播与上海早期都市文化建構（1923—1949）」、上海師範大学修士論文、2012年

申浩、「從邊緣到中心：晚清以来上海評彈研究」、上海師範大学博士論文、2012年

馮曉聰、「民国時期広播電台与滬劇發展研究」、上海師範大学修士論文、2018年

王婉如、「上海抗戰時期戲曲活動研究」、上海師範大学博士論文、2019年

Carlton Benson, “The Manipulation of Tanci in Radio Shanghai during the 1930s” , Republican China, 1995, Vol. 20, Issue 2, pp. 117-146

**【新聞雜誌】**

『電声日報』 (上海)

『中国無線電』 (上海)

『無線電』 (上海)

『勝利無線電』 (上海)

『每週廣播』 (上海)